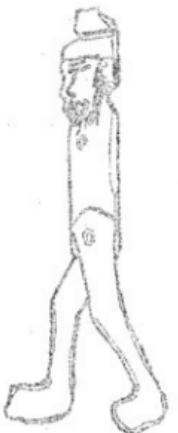


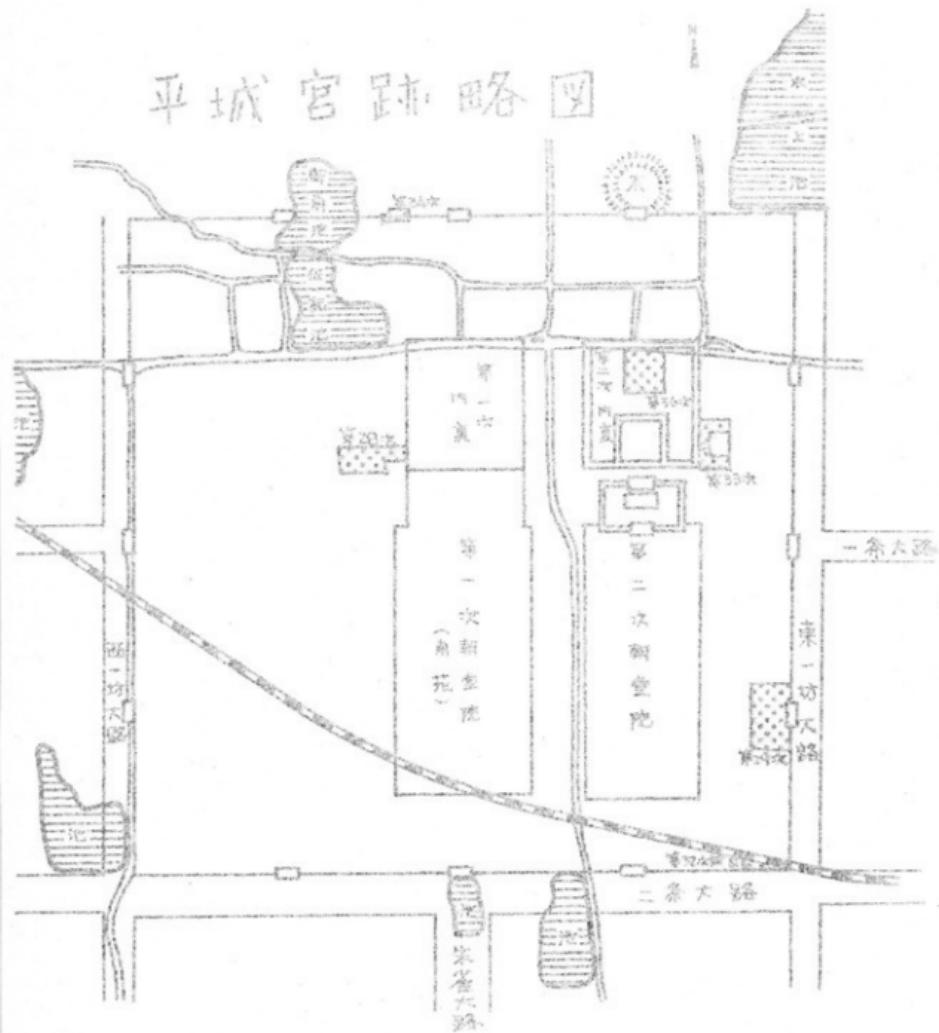
# 平城宮第28.29.33次発掘調査概報



昭和41年11月

奈良国立文化財研究所

平城宮跡略圖



表五  
第32次調查出土人形

## 平城宮跡28.29.33次発掘調査概要

奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部は、昭和44年度の特別史跡「平城宮跡」の発掘調査を、第28次以降第36次までおこなっている。ここでは前回報告した第32次にひきつづき第28次、29次、33次34次について、その概要を報告する。また32次補足調査も併せ報告する。

第28次調査は第1次内裏櫛走地域の西側、第29次は東面南門周辺、第33次は第2次内裏東側の外郭■地域でおこなった。

以上の各次別の調査地区、発掘面積、各期間は次表の通りである。

次數	調査地区	面積	期間
第28次	6ACC-C·F	32a	40.9.16 ~41.3.18
第29次	6AAg-M 6AAH-C	41.7.1 ~	
第32次補足	6AAI-C	11.81a	41.5.1 ~41.10.22
第33次	6AAD-H.I 6AAE-J	29.3a	41.5.2 ~41.8.15
第34次	6ACA-D.E	19.3a	41.5.12 ~41.5.26
第36次	6AAP-M.N	56.0a	41.7.27 ~

### I 第28次調査

調査地区は、庄紀北の南にあたるいちだん低い区域であつて、小字「北尻」に屬し、第1次内裏櫛走地域の西側である。

遺構としては、溝、土塁のほか、柵3条を検出したにすぎなかった。発掘地域東部では、南北に走る柵SA38タヨ-A(柱間2.85m)とSA38タヨ-B(柱間2.85m)を重複して検出した。また、これらから西へ約4.6mはなれて、南北の柵SA38タ5(柱間2.85m)があつた。

本地区西部は東面より約1mほど低く、東よりに、発掘地域外に延び

南北溝SD38タク(幅約3m)がある。西方からこの溝に並ぶ東西溝2条SD38タク(幅約1.4m), SD38タク(幅約1.6m)は、その東半部で土塙SD38タクによってほとんど破壊されている。

土塙SD38タクは、重複し群集する土塙がひとつになつたもので、苟部的に著しい量の瓦堆積を検出した。削平をうけて底石だけをのこす玉石溝SD38タクは、発出口に考えられる場所に合掌作りの木粗造設の跡あるところから、暗渠であったことが推察される。

そのほか、発掘地域中央にL字状に曲る溝SD38タク(幅約6m)と西端に地域外に延びる東西溝SD38タクがある。

平城宮以前かと思われる遺構に、発掘地域中央を斜めによぎる溝SD38タク(幅約1.6m)があり、溝底より弥生式後期の土器片を検出した。

出土遺物は少ないが、おもなものとして、南北溝SD38タクから木製百万塔未完成品1基、木製漆張柄頭 木筒25点がある。そのほか土器、瓦等と円座・席があつた。

以上の発掘結果から、遺跡の性格を判断することはむずかしい。遺構、遺物がさわめて少ないことが当地域の特徴であり、さらに今後の調査地域の調査成果をまつものである。

## II 第29次調査 東面南門周辺

調査区域は、東面南門(的門)推定位置とその西側一帯である。

発見した遺構は、建物2軒、横10条、狭地2条、溝26条、土塙2ヶ所、柱穴群である。この地域一帯は、地山が東南方向に傾斜しており、かなり大がかりな整地がおこなわれていた。各遺構は複雑に重なりあつてゐるが、時期に大別することができる。

A期 東面大垣(SAタクタク)と西側雨落ち溝、建物2軒(SBタクタク, SBタクタク)、横1条(SAタクタク)、溝3条(SDタクタク, SDタクタク, SDタクタク)とこの期に当てることができる。

大垣は掘り込み地形がなされており、掘り込みの深さは約35cmである。

この地形は門推定位置の北方で終っており、その部分で東に折れ曲がる可能性がある。

B期 露6条(SD3410, SD4358, SD4359, SD4326, SD4327, SD4386), 建物5棟(SB4398, SB4345, SB4351, SB4322, SB4325), 棚一条(SA4382)が考えられる。

C期 SD3410の西側で各所に墳築施設を検出したので、ここに南北方向に墓地等の構築物が存在したと考えられる。なお、この他に建物4棟(SB4347, SB4352, SB4368, SB4324), 棚2条(SA4353, SA4360)を本期に当てることが可能である。

D期 主要なものは、建物1棟(SB4364), 棚2条(SA4332, SA4336, SA4339, SA4393), 土塙1ヶ所(SK4322)である。SA4332とSA4393とにはさまれた部分にはかなりの数の建物のものと考えられない柱穴があり、これも当期であろう。

遺物 SD3410にもつとも多く、木簡、土器、瓦、木製品などが出土した。土塙(SK4322)では和銅4年の年号のある木簡を検出した。特殊なものとして、土鐘、フイゴ、鐵滓があり、この多くがD期の土塙からの検出である。

以上、第29次発掘調査では、地区内で東面南門と考えられる遺構が検出されなかつた。

むしろ、築成土の範囲から考えると、大垣が推定東面南門の北方まで延び、さらに東方へ折れまがる可能性がある。

東方の地域の今後の発掘調査が期待される。

## 正 第32次補足調査 宮城東南隅

第32次発掘調査は国道2号線バイパス敷設に伴なう緊急調査として、すでに宮城東南隅外側の東一坊大路、二条大路の交叉点でおこなつたが、今回はその補足調査として、宮内東南隅の発掘を実施した。

検出した最もな遺構は、南面大垣と染地／茶、建物2棟、櫛2条、溝4条、炉4ヶ所である。これらの遺構は大きく時期に区別することができ、層位的に可能である。なお、上、下両層で旧地表面を部分的に確認できた。

### 遺構

A期 この期に属するものは南面大垣、染地と溝などである。南面大垣(SA 4ノ20)は染地本体。犬走りが削平されていたが、基底部(中ノ3尺)と北側の雨落ち溝を確認した。

大垣から約40尺北に、大垣と並行に染地(SA 4ノ50)の基底部を検出した。中ノ0尺で、極り込み地固めをおこなわず、地山を削り出して造っており、旧地表面より約10cmの高さで残存していた。

染地は特に東側で削平がいちじるしく、東端の状態は不明である。

染地には、剥え柱をもつ棟門(SB 4ノ55)が付設されており、柱間寸法は10尺である。この染地に取りつくと考えてよい柵(SA 4ノ4ス)も検出した。門の西方に南北溝(Sロタノタ0)があり、染地部分では暗渠となっており、大垣の雨落ち溝に注いでいる。

B期 この期に属するものは、建物2棟、櫛/条、溝4条、炉跡4ヶ所などである。

まず、南面大垣は大きく修復され、基壇巾は北側で約10尺拡張され、犬走りに相当する部分には礎石がある。雨落ち溝はごく小規模なものになっている。大垣のこの修復にともなつて北側は広範囲に整地されこの整地面に建物、炉が作られている。

建物は礎石を使ったものである。炉跡は発掘地域の西端に4ヶ所検出したもので、いずれも整地層に掘り込んだ穴の底の部分が残存し、この部

分は強い火熱をうけている。該跡附近では、レフテ、銅鋌などを発見した。これらの年代は奈良時代末期から平安時代初期のものとすることができる。

遺物 全域で、木簡、瓦、土器、金属器、木製品などを検出したが、特に木簡は大垣北面落ち着で1万点以上出土し、大部分が式部省関係のものである。また金属製品は、第33次調査の際、外堀から大量に検出した帶金具、工具、飾り金具などと同様なものを多数認めることができる。また、フィゴ、銅鋌などの出土も多く、それが宮城のある種の工房と関連したものと考えられる。

#### IV 第33次調査

第33次調査は、第32次内裏東側の外部部にあたり、昨年度の第26次調査地域を□形に囲む地域でおこなった。

検出したおもな遺構は、礎石建物、掘立柱建物10、乘地、轍5、溝4、玉石敷道路、井戸などである。これら遺構は、A・B・C・Dのほぼ4面にわたりて造営されたとみることができる。

A期 A期の遺構には、南北乘地、東西乘地、その間にとりつく遺物、門、礎石建物、掘立柱建物、溝、暗渠等である。

南北乘地SA 205は、すでに第32次、第19次、第21次調査の際検出した第32次内裏の外郭をめぐる東面乘地の南延長部にあたる。

第26次調査の分とあわせると、柱間(2.95m)2ノ間分を検出したことになる。

この乘地と内裏内郭を囲む乘地回廊の東南隅をつなぐ東西乘地SA 4230がある。このSA 4230とSA 205の接続部外側に方1間の礎石建物SB 4230(柱間2.95m)を検出した。

角擇のごとき建物かと思われる。またSA 4230にSB 4230から約4m西へはなれて門SB 4230が開いている。2間以上×2間の南北棟東西廊柱礎石建物は乘地SA 205から西へ約6mはなれ検出した。この柱間(4.45m)は、宮城内で発見した遺物のうち、未雀門につく

広いものである。SB 4290の西に、幅4mの玉石敷造路SB 4289をへだてて、2間×2間の南北に長い等間の建物SB 4290（桁行26.8m、梁行5.9m）があり、その北に附櫓とおもわれる2間×2間以上の建物SB 3530（梁行5.9m）が柱間2.5間分をへだててたっている。これには南から2箇間に間に仕切がある。

雨落溝はこれら建物の三方をめぐつており、東西溝SD 4289に注いでいる。そのほか第26次検出のSB 3480の面妻延長線上に西側柱列をおく2間×3間の南北棟SB 4265（桁行4.9m、梁行4.8m）があり、さらに柱間2.5mの東西構SA 4245がある。

東西溝SD 4289のは、築地回廊入り口から始まる内裏内部の排水溝と思われるもので、SB 3530の前で南折し、さらに東折して東西築地に沿つて内裏外部へ延びている。この溝は東比SA 4205の下では玉石積の暗渠になつており、回廊に接する部分では板を組んで幅80cmの暗渠になつてゐる。

おそらく回廊下も同じ構造であろう。この暗渠の外は底石と側石に凝灰岩切石を用いてゐる。他の部分でも凝灰岩粉末および切石掛け痕跡があり、溝全体に凝灰岩の切石を使用したものであろう。

B期　　掘立柱建物2棟がある。第26次の調査で一部を発見した南北棟SB 3520（桁行19.2m、梁行15.4m）はSB 4290とSB 3530とに重複して南北端を換出し2間×5間と判明した。この建物は身舎の東西に廬（梁間2.9m）がつき、さらに東側へ孫廬（梁間2.4m）がついている。SB 3520の南北2箇所で5間×2間の南北棟SB 4289を検出した。西側柱列はSB 3520の西廬側柱に備え、東側柱列はその妻柱列に備えている。

C期　　C期はSB 3530に重複する2間×2間の南北棟SB 3550（桁行14.9m、梁行5.6m）1棟のみである。やや方位が北で西へふれていふ。

D期　　2棟の掘立柱建物と井戸がある。  
2間×2間の東西棟SB 3430（桁行13.45m、梁行5.2m）はS

ヨクロ5の南端で築地兩落溝から西へノタリのところを検出した。  
又間×又間の南北棟SBタヌ55（横行タウから梁行タウ底）の面柱列  
はSレミタヌ30の面妻柱列と揃えている。さらにこの2棟に並んで  
方ノマツの井戸SEタヌ50がある。

井戸枠は、垂木・床板の転用枠である。

出土遺物には、瓦、廻署、土番がある。おもなものとしては、玉石嵌  
道路Sメタヌ85上に數十片の三彩釉杯片があり、東西築地SAタヌ30  
の両側では軒丸瓦（63ノノ）、軒平瓦（666ターロ）が交互に並んで  
屋根からずり落ちたかたちで発見された。同時に検出した大量の丸、  
平瓦には、河・矢・田・修・冬・目・里・理の刻印があつた。

今回の調査で検出した遺構のうち、造営時期が推定できるのはA期である。  
この期の建物が2.95m（造営尺10尺）を標準とした等間であることと、柱通りがその10尺方以上に揃うことから、第2次内裏造宮  
期II—I期に比定することができる。

また東西の築地SAタヌ30があることから、内裏外郭がこの部分で区  
切られることが判明した。

#### ▽ 第34次調査

この調査は、現状変更に伴う緊急調査で、調査地域は昌武北縁中央か  
ら西へ寄った御前地に隣接する民有地である。

検出した壇構は、わずかに溝、井戸であるが、すべて平城宮以前のも  
のであった。

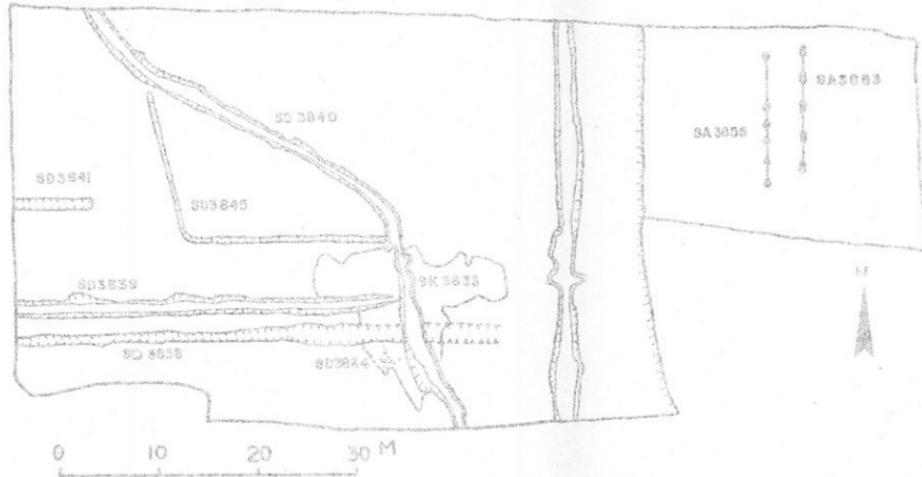
発掘以前に予観した宮城北縁をかぎる築地、構の位置は後世の削平を  
ラケおり、確認することはできなかった。

## VI 第32次補足調査出土木簡

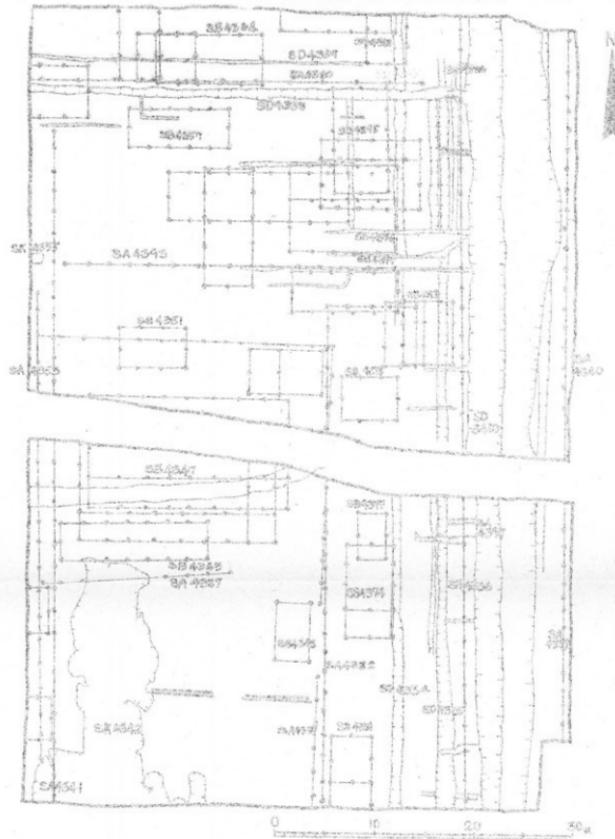
### 形 式

- (015) 云上位子從八位上伯称廣地年廿二  
河內國安道郡
- (015) 從八位下口口守公麻昌年五十四  
河內國元紀年 上日千百十口口
- (015) 依遷高麗使題天平寶字二年十月廿八日進階叙  
來
- (011) (表) 合一百卅八人 八位 口三人初食  
二人熟食 一百六人无位 鹿進階卅九人  
(裏) 大炊祭
- (018) 大學祭解 申稽直官人事 真卿正八位上集宜公水道  
天平寶字八年八月十一日
- (032) (表) 无位田邊史廣口進續勞錢伍百文  
(裏) 福津國 神龜五年九月五日 物口病  
住吉郡
- (061) (表) 諸司移 (遷談)  
(裏) 神鷦鷯寶  
五年
- (031) (表) 駿河國駿河郡古家鄉戶主春日部与麻呂調養堅負刑斤伍箇  
(裏) 天平寶字四年十月尊齒 因時歲次大仲為并查人  
御太祖正大皇帝生御口口哩

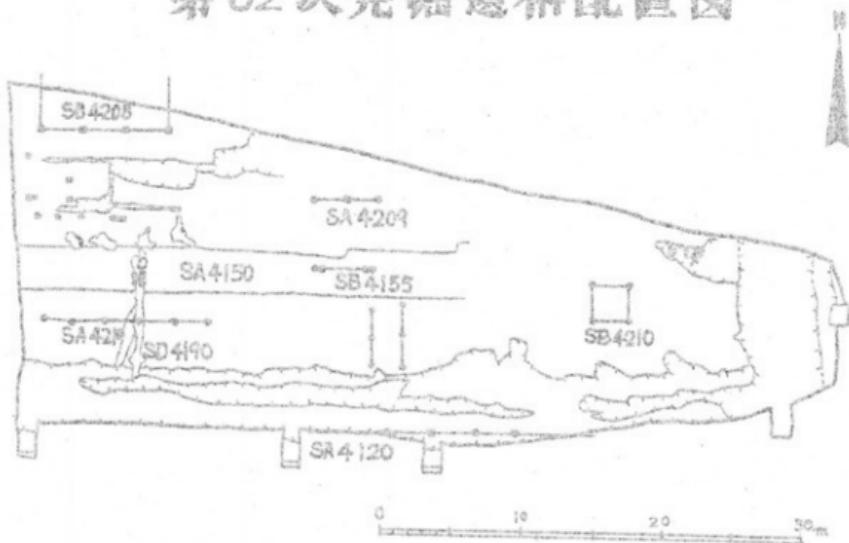
### 第28次発掘遺墳配置図



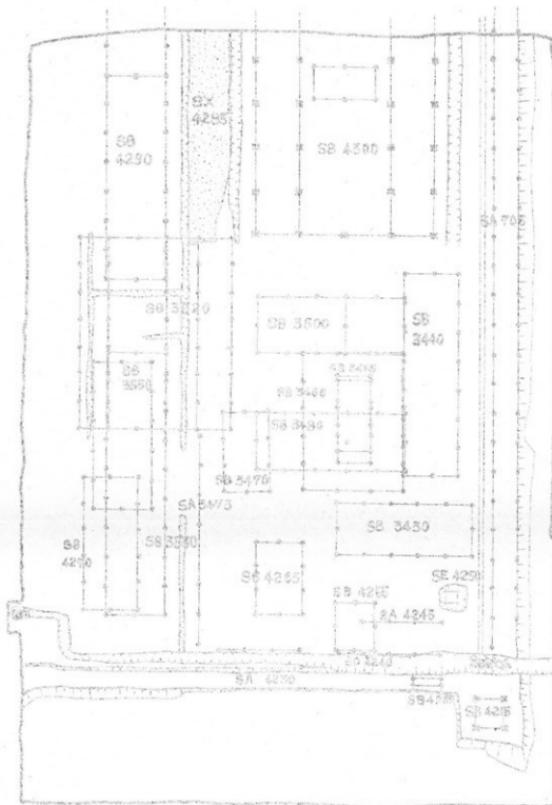
### 第29次発掘遺構配置図



## 第32次堀掘遺構配置図

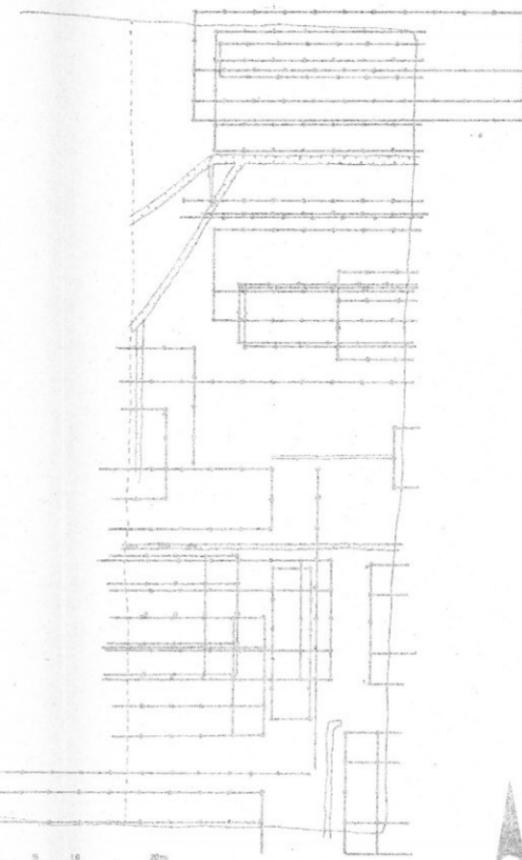


### 第33次堀越機配圖



(注) 第四回の第26次から(あわせ)。

東半部遺構配置圖



第36次發掘調查地區

